

和而不同

四季折々にいわゆる旬の花があるが、梅雨の時期といえば、やはり「紫陽花」が代表的だろう▼あのカラフルな色彩は土壌の性質によって決まるそうだ。酸性なら青色、アルカリ性ならピンク色へと

移ろうことから、花言葉は「七変化」。別名「無常の花」とも呼ぶらしい▼無常といえば、「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。」という、『平家物語』の有名なフレーズがある。しかし、ここでの悲嘆／詠嘆的イメージは、あくまで無常の一側面に過ぎない▼『すべて現実のものは移り変わっていくー』（ブツダ遺誠の言葉）。花が散るのが無常であれば、花が咲くのもまた無常ゆえである。人が亡くなることもまた無常であれば、人が育つのもまた無常ゆえである▼生まれたものは、いつか必ず息絶えてゆく。ひとたび縁がもよおせば、次の瞬間が「その時」だ。ゆえに今、いのち恵まれているということとは、あたりまえではなく、実は何よりも不思議なことなのだ▼それでも別れはやってくる。大切な人だけでなく、自分自身とも、だ。『無常』とはいのちの本質を語る、厳しい言葉であるとともに、その厳しさはまた、いのちに向き合っている証でもあるのだろうか。

